

第 33 回日本受精着床学会

東京都、2015.11.26-27

不妊症患者における甲状腺自己抗体測定の意義

市橋 佳代、河野恵美子、道脇 悠加、佐藤 学

姫野 隆雄、伊藤啓二郎、中岡 義晴、森本 義晴

医療法人三慧会 I V F なんばクリニック

【目的】

妊娠と甲状腺に関する国際ガイドラインが策定されて以来、妊娠前・妊娠時における甲状腺機能検査の重要性が高まっている。潜在性甲状腺機能低下症と流産の関連が指摘されていることから、当院でも 2012 年 11 月より TSH（甲状腺刺激ホルモン）の基準値を 0.5～2.5 μ IU/mL に変更した。潜在性甲状腺低下症疑いの患者はヨード摂取制限を行い、積極的に甲状腺専門内科へ紹介し、必要に応じてサイロキシン補充治療を行っている。

また、甲状腺自己抗体陽性者では流産率が高く、妊娠初期にサイロキシン治療を行うと、流産を防ぐ事が出来るという報告もある。

そこで今回、甲状腺自己抗体である抗サイログロブリン抗体（TgAb）測定の意義について検討した。

【対象と方法】

2014 年 4 月から 2014 年 11 月まで不妊が主訴で当院を受診した 467 症例を対象とし、TSH、FT4（遊離型甲状腺ホルモン）、TgAb を測定した。

また、TgAb 抗体価により陰性群（28 IU/mL 未満：単位以下省略）と陽性群を 28～100・101～300・301 以上の 3 群に分け、流産既往の有無を後方視的に調査した。

対象患者年齢は 35 歳以下とした。

【結果】

TgAb 陽性率は 17.1%（80/467）で、甲状腺ホルモン（TSH・FT4）は正常であるが、TgAb 陽性例が 15.0%（53/354）認められた。

流産の既往は TgAb 陰性群では 22.4%（67/299）、陽性群ではそれぞれ 21.7%（5/23）、25.0%（4/16）、33.3%（9/27）で差を認めなかった。

【考察】

今回の検討では、TgAb 抗体価と流産の既往は関連を認めなかったが、今後さらに症例を増やし、甲状腺内科とも連携を取りながら、サイロキシン補充の有無や妊娠の転帰についても調査していきたい。